

溜め家 —ため池と共に生きる大きな家の提案—

農業用水という本来の価値を失い、日常から切り離され、今も尚、まちから消え続けるため池。
「懐の大きさ」に価値を見出し、建築と営為が一体となった、様々な者と共に生きる集合集落を提案する。
そこは、現代社会では見ることのできなかつた「大きな家」に成り得ると考える。



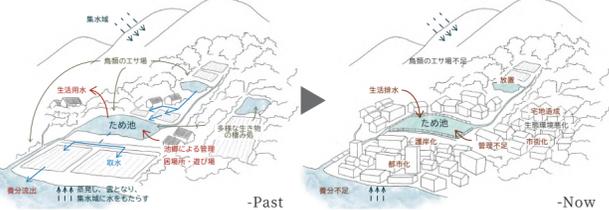
春 夏 秋 冬

00 小さな世界で暮らす私たち

私たちの世界は、とても大きいようで、とても小さな世界だった。
便利に、安全に、何不自由なく暮らすことができるようになった。しかしその世界の本性は、生活に要らなくなったものから目を逸らし、切り落とし、残った要素を管理下に置く、大らかとは真逆な、窮屈な世界だった。

01 ため池と共に生きてきたまち

安定した農業・生活用水確保のため、「ため池」が数多く造られた大阪・泉州。それは、長らく私たちの生活を支えてきたが、産業構造の変化を受け、皮肉にも、それを造り出した人々によって、その多くが埋め立てられ、姿を消した。そこは、多様な動植物の棲み処となり、人々が手を掛けることで、豊かな循環をもたらす、このまちの「大きな家」に成り得ていた。



02 新たな価値を有したため池の提案

価値を失ったため池は、それ単体で継続して在り続ける意味を見出せていない。そこで建築と営為を一体で考えた、様々な者が共生できる集合集落を提案する。そこは、埋め立てによる宅地造成ではなく、日常的・持続的に介入しながら成立する、懐を持った、ため池と共に生きる「大きな家」となる。



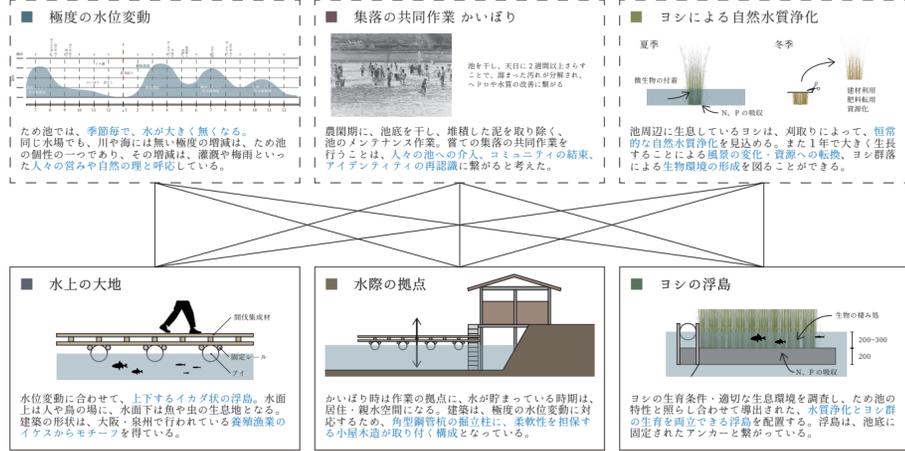
03 計画敷地〈堺市・森池〉

現在、農業用水、災害時の生活用水の役割を担っている森池。2029年末に都市計画道路が直ぐ傍を開通することとなり、都市における少ない自然環境が、消えてしまう可能性が見えられる。



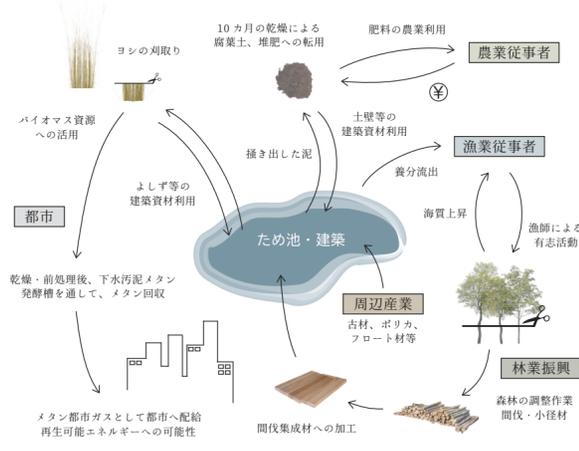
04 3つのキーワードから建ち上がる〈ため池建築〉

ため池再生のために、「極度の水位変動」、「かいぼり」、「自然水質浄化」の3つのキーワードからアプローチし、ため池建築を設計する。これらの建築は、相互的に関係し合いながら、ため池の新たな環境を形成する。またため池の特性を体感できる、ため池独自の建築形式となる。



05 ため池と建築が生む大きな循環

ため池は、建築を通して、池の中だけでなく、地域・まちをも射程に有した循環を形成する。滞っていた産業間の関係性や再資源化されないエレメントの利活用などを促し、まち全体を「大きな家」へと変化させていく。



06 池に溜め、まちを動かす場所へ

池や周辺に点在する生業や生活の技術・文化・資源を「溜め、活用する」ことで、ため池は、都市化によって、ため池は、滞っていたまちを再び動かしていく場所として、甦る。



そこで住まう人々や農業従事者、近隣住民との中で、農や食を介した繋がりが生まれる。散歩道や通学路にもなっている堤体は、日常的な人々の居場所として、展開する。

隣接する農園での農作業や、農閑期のかいぼりやヨシ刈りといった営みを通して、生き物たちの環境を整えながら、分断されていた都市における共同体の強度を、再び高めていく。

都市化していくまちで少なくなった自然環境。季節によって在り様を変えるため池は、人々が生物多様性を学ぶ場として、様々な動植物の豊かな家として、そこに在り続ける。

来たる南海トラフ巨大地震。池の水は、災害時の生活用水となり、人々の一時的な家が溜められる。これまでの日常の中で溜められてきた資源・資材が利活用され、まち再建のきっかけ・支えとなる。